鉄スクラップヤード業

タニヒラ 創業40周年

鉄スクラップヤード業、タニヒラ（本社・千葉県市川市、社長・谷平竜幸氏）は今年6月で創業40周年を迎えた。同社は本社工場と、その隣接地にある第二工場に各1基のギロチンシャーを備え、月間約5千㌧の鉄・非鉄スクラップを加工処理している。東京・江戸川区で祖父の代から事業を始め、会社としては2代目となる谷平竜幸社長に、これまでのタニヒラの歩みと、スクラップ業の激戦区で事業を展開している現在の同社の強みなどを聞いた。（小堀　智矢）

谷平竜幸社長に聞く

「キメ細かなサービス」モットー

“ドライブスルー”式ヤード目指す

東日本大震災で設備浸水も

港の近さ強み、市況変動に迅速対応

――1979年（昭和54年）6月1日に東京・江戸川区で谷平商店として創業した。創業に至る経緯は。

「戦前の話だが、私の祖父、谷平茂壽（しげじゅ）は軍需設備の製造に携わっていたらしい。その関係で、戦後は端材などスクラップの扱いを始めたようで、その証拠に東京・江戸川区の自宅にはシャーリング設備が残っていた。その後、父の惟一（ただかず）が1979年に江戸川区船堀で鉄スクラップ業を本格的にスタートした。当時はギロチンなどの設備はなく、台貫とクレーンだけの約200坪の工場で仕切り商売をしていた。江戸川区は鉄スクラップ業の多い土地柄で、私も子供ながらに業界の人たちに可愛がってもらった記憶がある」

――1989年に工場を市川市に移転したのは。

「当時ギロ材を中心に扱い量が月1千㌧超に増えていたため、工場が手狭となり、加工処理に進出する必要もあったようだ。工場近くに船堀駅ができ、事業環境の変化も移転の決断につながったと思う。もちろん父が移転を決めたが、大きな借金を背負うことになるため、息子の私にも『移転をどう思うか』と問いかけがあったのを覚えている。苦渋の決断だったのだろう。移転後3年間はバブルの余波もあって、順調に借金の返済が進んだ。しかし、その後はバブル崩壊で返済に苦しんだと聞いている。父は約20年かけて借金を完済した後、少し経って社長を私にバトンタッチし、60代半ばで引退した」

――今年で40周年を迎えた感想は。

「40周年という実感はないが、私が入社したのは199●年で、25歳の時。そこから、ちょうど25年経った。2003年に私が社長に就任してからは16年。もう16年も経ったかというのが正直な感想だ。社長として振り返ると2008年10月に第二工場の新設で苦労した思い出が大きい。リーマン・ショック直後であり、新工場で加工するスクラップ在庫を貯めていたため非常に苦しい思いをした。第二工場の出足をくじかれたことが強く印象に残っている」

――最も辛かったのがリーマン・ショック後だったか。

「確かに損失は大きかったが、リーマン・ショック前は市況高騰で利益も出ていたため、何とか乗り越えられた。むしろ、最も辛かったのは2011年3月の東日本大震災だ。千葉県では浦安市の液状化が大きく報じられたが、実は当社がある市川市の高浜工業団地は海水による浸水被害を受けている。道路も冠水し、当社は約10日間、完全休止を余儀なくされた。営業を再開した後も、加工処理が出来るまでに1～2カ月かかった。本社工場のギロチンは地上式のため難を逃れた。しかし、第二工場のギロチンは地下に設置されており、海水を被ったため全て使用不能となった。設備更新や私道である道路の復旧費用に加え、約2カ月分の加工処理ができなかったことで億単位の費用がかかった。第二工場の借金返済がスタートしたばかりなのに、新たな借入れをすることになった。今でこそ言えるが、当時は正直もうダメかと思うこともあった」

震災数日後の工場前道路の様子

――震災後、どのように会社を軌道に乗せたのか。

「事業が厳しかったのが3～4年前。メーカー買値で1万円台が続き、流通量も大きく落ち込んだ時期だ。当時、銀行や税理士の勧めもあって当社は固定費を削減し、結果的に扱い量を月3千㌧に減らす方向に舵を切った。これが失敗で、利益に結びつかなかった。そこで、やはり鉄スクラップ業は扱い量が重要であるということを銀行に説明。営業の人員を新たに雇い、当社に2基ある加工設備を活かせる月5千㌧に数量を回復させた。つまり、売上げを増やす方針に転換した。ここ2、3年は市況が上昇基調にあったこともあり、ようやく事業が軌道に乗ってきた。新工場建設などで抱えた借金の返済や、事業の浮き沈みを考えると、今の私は父と全く同じ道を歩んでいる。歴史は繰り返すというのが実感だ」

――現在のタニヒラの強みとは。

「当社は大手の鉄スクラップ業者がひしめく中にある中堅のヤード業者だ。大手と同じことをやっても勝てない。中堅ならではのきめ細かなサービスをモットーにしている。具体的には、常に2～3人の誘導員を工場の入口に配備。すぐに荷降ろしの場所を指示し、コンテナのダンプアップも当社の従業員が行う。誘導員が顧客の目線でサービスし、極端に言えば、トラックの運転手が車から降りることなく、荷降ろしできる“ドライブスルー”式のスクラップヤードを目指している。また、4㌧車など小口の荷物も歓迎し、アルミなどが混載されたスクラップもしっかり検収する。例えば給湯器が一つ混じっていても、小秤を使って1キロ単位で評価している。ほかにもサービス向上に関する様々なアイデアが現場から提案されてくる。小口が中心なので非常に顧客数は多いが現場の士気が高く、しっかり対応できることが当社の強みだろう。当社周辺は鉄スクラップ業の激戦区だが、大手との棲み分けもきちんとできている」

――扱っている品種の特徴は。

「当社はH形鋼や鉄筋など都内から発生する建築解体のスクラップが多い。トタンなど薄物のスクラップも小型重機でしっかり選別しており、薄物の品質に関して高い評価を得ている。アルミや銅などの非鉄も扱い、受け入れた雑品はきちんと選別している。当社は都市型ヤードで敷地は広くないが、ギロチンダストも置き場を設けてきちんと管理。手間暇とコストをかけて受け入れたスクラップを可能な限りリサイクルしている」

――販売先に関する特徴と強みは。

「船橋港やお台場13号地など港が近いことが当社の大きな強みだ。少ないトレーラーでもピストン輸送でまとまった数量を出荷できるため、市況変動に対応しやすい。もちろん電炉メーカーにも納入している。現状では港が6割、電炉メーカーが4割という出荷状況だ。工場を当地に移転した89年当時は輸出などほとんどなかった時代。先代の父に先見の明があったのかは分からないが、非常に良い場所に移転してくれたことには感謝している」

――次の50周年に向けて意気込みを。

「社長として10年後の目標は当社の現状をしっかり維持し、まずは借金を完済したい。私が目指しているのは『社長から見て、全ての従業員に目が届く範囲の会社』だ。それ以上、大きくしようとは思わない。従業員の人数で言えば30人くらいが限界だろう。皆と家族ぐるみの付き合いができ、従業員と社長が同じ目線で仕事ができる会社が理想的だと考えている」

タニヒラの会社概要

名称	株式会社　タニヒラ
所在地	【本社工場】
	千葉県市川市本行徳2554番地40
	ＴＥＬ：047－399－7667
	ＦＡＸ：047－398－1911
	【第二工場】
	千葉県市川市本行徳2554番地70
設立	1979年（昭和54年）6月1日
資本金	9900万円
従業員数	21人
役員	代表取締役　谷平竜幸
	監査役　谷平ゆかり
事業内容	1. 鉄・非鉄スクラップ加工処理業
	2. 産業廃棄物の中間処理業
	3. 産業廃棄物の収集運搬業
	4. 古物の売買業
	5. 計量証明事業
スクラップ扱い量	月間5千㌧
主な納入先（順不動）	（株）伊藤製鐵所、（株）城南製鋼所、千代田鋼鉄工業（株）、合同製鐵（株）、ＪＦＥスチール（株）

タニヒラ　40年の歩み

1979年（昭和54年）	東京都江戸川区船堀に有限会社谷平商店を設立 資本金　600万円　　代表取締役社長　谷平惟一
1989年（平成元年）	本社工場を千葉県市川市本行徳に移転 ギロチンプレス（北町　1000㌧）・50㌧台貫設置
1990年（平成2年）	本社工場　東京都産業廃棄物収集運搬業許可取得
1996年（平成8年）	ギロチンプレスをリプレース（モリタ　600㌧）
1998年（平成10年）	廃棄物再生事業者登録所得
2003年（平成15年）	代表取締役社長に谷平竜幸就任
2004年（平成16年）	千葉県産業廃棄物処分業許可取得 千葉県産業廃棄物収集運搬業許可取得
2005年（平成17年）	千葉県自動車リサイクル破砕業許可取得
2006年（平成18年）	千葉市・船橋市・神奈川県・横浜市・川崎市・埼玉県・さいたま市　産業廃棄物収集運搬業許可取得 商号を株式会社タニヒラに移行　資本金1000万円
2008年（平成20年）	隣接地に第二工場設立 ギロチンプレス（テヅカ　1000㌧） ＩＳＯ14001　認証取得
2009年（平成21年）	柏市産業廃棄物収集運搬業許可取得 資本金9900万円
2011年（平成23年）	栃木県産業廃棄物収集運搬業許可取得

本社工場

第二工場

“都市型ヤード”の本社工場、第二工場

小口は本社、大口は第二で受入れ

混雑時は臨機応変、「待たせない」誘導

1989年に稼働した本社工場は加工設備に600㌧のギロチンシャー1基を備えている。2008年に開設された第二工場は加工設備として1千㌧のギロチンシャーを1基備える。両工場とも敷地面積は約660平方㍍と限られたスペースを有効に活用する“都市型ヤード”。特に第二工場は建屋内に深さ5㍍のピットを設けており「外から見ると200～300㌧しかないように見えるが、実際はもっと多くある」（谷平社長）という。

両工場はほぼ隣接しており、誘導員の指示により本社工場には4㌧車など小口の顧客を受け入れ、第二工場は10㌧トラックやトレーラーなど大型物件を受け入れている。小口と大口の顧客を工場別に分けることで、必然的に本社工場はH2、H3のスクラップが多くなり、第二工場はH1、HSといった上級グレードが主力となる。両工場の設備能力にも合った受け入れが出来ている。

人員に関しては、第二工場は3人程度で操業しているが、手間のかかる小口に対応する本社工場は10人前後を配置している。本社工場内には雑品やステンレス、アルミ、雑線の置き場スペースが確保されている。

本社工場が混雑した場合は臨機応変にトラックを第二工場に誘導する。「なるべく顧客を待たせない。並んでも10分以内に荷降ろしできるようにすることをモットーにしている」（谷平社長）。

タニヒラの主要設備

機械設備	【本社工場】	
	ギロチンシャー（モリタ製）　600㌧	1基
	リフマグ付天井クレーン（京和工業製）　4.5㌧	1基
	ホイストクレーン（ＫＩＴＯ製）　2.0㌧	1基
	【第二工場】	
	ギロチンシャー（テヅカ製）　1千㌧	1基
	リフマグ付天井クレーン（京和工業製）　4.8㌧	1基
	フォーク型油圧グラブ（京和工業製）	1基
	ダスト選別機（クリーンエコロジー製）	1基
車両	大型トレーラー　20㌧	3台
	大型車　8㌧～10㌧超	4台
	大型車　10㌧超　脱着装置付コンテナ専用車	1台
	大型車　8㌧　脱着装置付きコンテナ専用車：ヒアブ付	1台
	脱着用コンテナ　8㎥～22㎥	7個
	スクラップ用小型コンテナ　1㎥～2㎥	20個
作業車	ユンボ　0.25㎥～0.70㎥	3台
	ショベルローダー	1台
台貫	トラックスケール　公認台貫　50㌧	1台

鉄リ工業会・千葉部会長の谷平氏

業界活性化に尽力

部会の枠超えた交流の“立役者”

18年の合同納涼例会で挨拶する谷平千葉部会長

谷平竜幸社長は、日本鉄リサイクル工業会の関東支部千葉部会で部会長を2012年から務めている。業界の活性化を図るべく、同会の活動を積極的に展開。まず最初に始めたのが千葉部会と関東鉄源協同組合の京葉会による合同ゴルフコンペだった。両会のメンバーはほぼ同じだったことが契機だが、京葉会と城東部会が同じホテルで会合をしている縁で、その後、同コンペに城東部会も参加するようになった。

また、千葉部会は2016年から新年会に他部会の参加を呼びかけ、広く会員との交流を深める取り組みをスタートさせた。そうした中、同年5月に城東部会の部会長に伊藤貴司氏（伊藤信司商店社長）が就任。伊藤氏が親交の深い谷平社長に新たな企画を相談し、17年8月に城東部会と千葉部会、関東鉄源協同組合の京葉会による「合同納涼例会」が開催された。さらに18年の合同納涼例会は鉄リ工業会関東支部の4部会（城東、千葉、城北、埼玉）と関東鉄源協同組合の2会（京葉、埼京）によるイベントに拡大。113人が参加する盛大な交流会に発展した。今年も8月21日に開催される合同納涼例会は昨年にも増して盛り上がりを見せているという。

関東地区における活発な交流活動の原点をつくったのが千葉部会の谷平部会長。部会の枠を超えた交流の立役者と言えよう。